

先週、私たちは時間のスチュワードシップということで、神様からいただいた時間を有効に用いるためにはどうしたらよいかということ学びました。私たち人間の感覚では、時間を一分一秒でも無駄にしない生き方こそが時間の有効な使い方であると考えがちですが、より短い時間により効率よく生産性を高めるあり方は、実は神様が作り出した自然の時間を破壊するものであることを私たちは学びました。狭い空間に押し込められ、人工的に作り出された昼・夜によって一日に何個も卵を生産するように単なる生産物とされた鶏は、生活のリズムを崩されていく中で、劣化し、不安定化し、混乱し、暴力化していきまます。鶏は隣の鶏をくちばしでつつき、豚は隣の豚のしっぽを噛む。困った生産者たちは、鶏がつつかないようにくちばしを縛り、豚が噛まないように歯を抜くのです。狭い空間で速いスピードの中で生かされておかしくなっているのは、鶏や豚だけではなく、私たちの社会に起こっているさまざまな異常な犯罪、人間が劣化し、不安定化し、混乱し、暴力化していく。これは人が自然の時間や空間に反して、狭いところに押し込められ、速いスピードの中での生活を強いられていることが原因になっているのではないのでしょうか。神様から与えられた時間を本当に有効に用いるためには、私たち人間の自分勝手な都合による時間の使い方、効率や生産性だけを考えてより早くより多くという考え方そのものを改めて、神様が造ってくださった自然に合わせた時間の営みをする必要があるのです。

このように、人間はいつの間にか、効率や生産性の高いものがいちばん良いことであると考えようになっていきました。その結果、人間自身の価値観も生産性や効率で判断されるようになっていきました。より良い物をより早く作り出す技術や能力を持っている人が価値のある優れた人間であり、物を作ることが遅い人や作り出せない人たちは価値の低い人間である、とされてきたのです。この世の中は競争社会となり、より能力の高い者、より優れた者になることが競い合われてきました。学校の受験も受験戦争と言われ、私立学校や塾では成績によってクラスや席順が代わったりする。みんなに見える形で成績を表すことによって、やる気を起こさせる。より成績の良い人間が競争に勝っていく。成績の優れた人間が価値の高い人間だと評価される。学校の成績があたかもその子の全人格であるかのように評価される。私たちの社会はそのような価値観の社会なのです。

奇恵英（キ・ヘヨン）さんという福岡女学院大学の先生がおられます。奇先生の書かれた「きっと、だいじょうぶーサラと歩いた日々ー」という本があります。サラちゃんは奇先生のお兄さんの娘、姪になりますが、サラちゃんが生まれて3ヶ月の時に、お兄さん家族が交通事故に遭い、サラちゃんのお母さんが亡くなり、サラちゃんも脳に大きな損傷を受けました。事故当時のサラちゃんの様子を、奇先生は次のように記しています。【ベッドに近づくと、看護婦さんが白いカーテンを開けました。そこには、素っ裸にされて、目をギュッと閉じたままの赤ちゃんが、白いシーツの上にポツンと置かれていました。事故の時に頭をぶつけたらしく、生まれて三ヶ月あまりの柔らかい頭は鉄砲玉のようにてっぺんが尖り、全身はチアノーゼのため、紫、青、黒、赤と絵の具を乱暴に混ぜたような色でした。】このサラちゃんは、生死の境目をさまよいながら必死に生きるための戦いを続けました。しかし、生きるための戦いは自分との戦いだけではなかったと奇先生は言います。

【「入院中、サラが戦うべき相手は、絶えずやってくる発作や何日も下がらない高熱だけではありませんでした。私から見ると、それはお見舞いに来てくれる人たちやサラに関わるスタッフなど、ベッドに横たわるサラを見つめる<人々の眼差し>でした。なぜなら、

訪れたほとんどの人が、“小さい子がこれほど苦しい思いをしてかわいそう。助かったとしても人並みに生きられないのなら、早く楽になった方がいいのに…”と書いていたからです。医療スタッフさえも、脳がだめだったらこの子が助かってもし周りや本人が苦勞するだけ、と書いていました。それぞれ言い方や表現の仕方は異なりましたが、サラのいのちに同情し、結果的に否定するその思いははっきり伝わってきました。

正直言って私でさえ、何度も“もうそこまで頑張らなくてもいいよ”と思うことがありました。しかし、数多くの苦難を乗り越ったサラを見てきた私は、どんな危険が迫ってもこの子は負けない、と確信せざるを得ませんでした。こんな強い生命力をもっているにも関わらず、この子が世間にさらされたときにはほとんどの人によって否定されるという事実は、私に大きな衝撃と同時にひらめきを与えてくれました。

私は、そのようにいう人は何を拠り所に生きているのだろうか、と思いました。脳に損傷があったり、障害を持つようになっていたりすることで<人並みの>生活ができないのであれば、生きることはただの苦痛でしかない、と多くの人が思っているように感じました。言い換えれば、自分の生きる価値観は<人並みに>何かができることで決まると思っている。だから<人並みに>歩むルールから外れることを恐れたり、<人並みに>自分と他人を比較して優越感を持ったり劣等感を覚え、喜んだり落ち込んだりするのではないか。それは結局、自分の生きる拠り所が他人の思いの中であって、自分の中にある空しさにつながるのではないか。私自身も、今まで何となくそう思って頑張ろうとしたり落ち込んだりしてきたのではないか。

こうした思いに及んだとき、私の中で自分を不自由に閉じこめていた壁が、音を立てて崩れるような驚きを覚えたのでした。】

この世の価値観、人間の常識は、生きる拠り所として生産性や効率性で人の価値を判断します。人間の価値は、その人の学力や能力などの社会的価値で決まる。しかし、そのような社会的価値観は、サラちゃんに対して厳しい目で迫ります。「小さい子がこれほど苦しい思いをしてかわいそう。助かったとしても人並みに生きられないのなら、早く楽になった方がいいのに…。けれども、奇先生は問います。苦しく辛い思いをしている人は、早く楽になった方がいいのだろうか。それでも一生懸命に生命の戦いをしている幼い子は、生き続けていく価値がないのか。

かつて、そう言いきった社会がありました。<生きるに値しない生命>とあって、社会から抹殺された人たちがいました。第二次世界大戦中、ドイツは戦争に勝つために優秀な民族を作り上げようとしていました。そこで、いわゆる心身障害者が子孫を残さないようにと、国内の心身障害者を集めて子どもが産めないように、断種を行いました。そしてさらに、戦争が激化し、国内の物資が不足してくると、戦争にも行かないで食糧を消費している人たちが邪魔になってきました。この物資の少ない中で、戦争の役に立たない彼らに与える食糧すらもつたいない。そうやって、心身障害者たちは<生きるに値しない生命>と名付けられ殺されていったのです。しかも、彼らを抹殺するのに銃弾を使うことさえもつたいないといって、大量に安く殺すために開発されたのが毒ガスでした。その毒ガスが、やがてアウシュビッツでユダヤ人大量虐殺のために用いられていくのでした。

私たちの国でも、かつて優生保護法という法律がありました。「不良な子孫の出生を防止する」目的で、障害や遺伝性疾患のある人へ強制的に不妊手術や人工妊娠中絶を認めた法律です。この優生保護法はドイツの<生きるに値しない生命>という思想が反映されたものでした。

私たちの生きる拠り所とはいったい何なののでしょうか、それはどこにあるのでしょうか。私たちの生きる拠り所。パウロは、コリントの信徒への手紙一6章19節以下でこう語ります。「知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい」。

私たちの体には、神からいただいた聖霊、神の霊が宿っていてくださるのだ。あなたにも私にも、奇先生にも、サラちゃんにも、サラちゃんが早く楽になった方がいいと言った人たちにも。すべての人に、神様の霊が宿っていてくださるのだ。

イエス・キリストの十字架の贖いによってすべての人が神様に買い取られ、その一人一人に神の霊が宿っていてくださる。それを知っているのかいないのか、それを信じているのかいないのか。その違いはあるけれども、イエス・キリストの十字架の贖いを知っているか・いないかにかかわらず、すべての人がこの世界で命を与えられ、生かされています。神が与え給うたその生命に、生命の重さに、優劣があるはずがないのです。＜生きるに値しない生命＞など、この世に存在しないのです。私たちの生命は神様によって与えられ、神様によって生かされ、神様によって贖われ、神様によって聖霊の住まいとされているのです。私たちの生きる拠り所は、まさにここにあります。他の人たちや社会から私たちの価値を決めつけられるのではなく、私たちの生命はすべて等しく尊い生命として神様から授かっているのです。自分の生命も、他の人の生命も、大切なかけがえのない生命として、神様からいただいた聖霊の住まいとして、存在するのです。ですから、私たちはこの生命もこの体も、大事に使わなければなりません。生産性や効率を目指すのではなく、人と人との間に上下関係をつけて上の者だけが価値があるかのように評価するのではなく、勝ち組に残るためでもなく、そうではなく、すべての人が「自分の体で神の栄光を現」すために、この生命と体を用いなければならないのです。

パウロは言います。【「すべてのことが許されている」。しかし、すべてのことが益になるわけではない。「すべてのことが許されている」。しかし、すべてのことがわたしたちを造り上げるわけではない。】主によって贖われた私たちは、この世においてすべてのことが許されています。何をしても良いし、しなくても良い。しかし、すべてのことが私たちの益になるわけではない。この益という言葉は、昔の口語訳聖書では人徳の徳という言葉が用いられています。すべてのことが私たちの徳を高めるわけではない。すべてのことが私たちを造り上げるわけではない。だから私たちは、何をすべきなのか、何をしないで行うのか、この世の価値観に流されるのではなく、神様に問いながら、自分で判断をしなければなりません。しかし幸いにも、神様は私たちにそのような力を賜ってくださいます。物事を人間社会の価値基準からではなく、神様の目から見た価値によって判断する力。それが主からいただくことのできる力、十字架と復活によって与えられる力なのです。そしてそれが、神様からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿としての、私たちの体に与えられた力なのです。それゆえ、パウロはこう語るのです。【だから、あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい。】

私たちも神の聖霊の住まいである体を大切に使いながら、神の栄光を現すために生かされていくために、聖書の御言葉と礼拝を第一とする生活を続けていきたいと願います。

お祈りしましょう。